

外国語習得初期における聞き取り訓練の役割

渡邊一保

(奈良教育大学 英語教育講座 (英語科教育))

The Role of Training in Listening Comprehension in the Early Stages of Foreign Language Acquisition

Kazuo WATANABE

(Department of English, Nara University of Education)

要旨：一部の例外（帰国生など）は別にして平均的な大学生の聞き取り能力はいつまで経っても一向に向上していない気がする。原因は入試での扱いが軽いために真剣に取り組まないということがある。更には、聞き取りの役割に関しての英語の教員や専門家と呼ばれる人達の認識度が低すぎるということがある。一方研究においては90年程前のPalmerは言うに及ばず、40年程前のAsher、25年程前のKrashenなどが一貫して外国語習得の初期においてはオーラルの技能、特に聞き取りが重要だと指摘している。そこで新渡戸稲造を初めとする英語の達人達の英語習得の実態を検討することでPalmerらの研究は納得のいくものだと結論づけた。英語教育の現場が生徒の英語力の向上を真に願うならば聞き取りを重要課題とすべきである。

キーワード：聞き取り Listening Comprehension、臨界期 The Critical Period、暗示的知識 Implicit Knowledge

1. はじめに

センター試験に聞き取りが2006年に導入されたが、少なくとも筆者が日々接する大学生の聞き取りの力は未だに非常に低い。これは30年来ほとんど変わっていないように思える。中学や高校の英語教育において聞き取りの指導がしっかりと位置付けられていないことに起因する。ここでは聞き取りの指導への取り組みを妨げている要因を踏まえ、聞き取りの役割に関する理論的研究を検討することで、いかに聞き取り能力が読み書きを含めた外国語習得向上のカギとなっているのかを示したい。

2. 問題の所在

2.1. 訳読至上主義の弊害

1) 個々の単語や文単位の文法を気にして辞書に頼り時間をかけて訳読訓練をするわけだが、これでもある程度は読める気にはなる。しかし聞くはおろか使えるという実感はない。日本語で理解しないと気がすまなくなり、このため英語の流れについていけなくなる。これについては、例外はもちろんあるが、改めて調査をする必要もない位当たり前に起こっていることである。筆者自身の50年間に亘る英語学習と英語指導に

よる観察の結果でもある。

- 2) 目で文字を確認し読まない不安を感じ、音声だけで意味の理解が出来にくくなる。英語の授業を参観すると生徒が俯いてテキストを見ている場合が多い。脳科学者の鈴木(1991)も日本全国で、まず音から生徒に英語に触れさせるような学校は皆無と述べている。その結果脳は英語とは視覚から得られる情報と訓練されてしまい、それ以外からの情報は無視すると述べている。これは少し古いデータだとすると文科省の2008年の調査では高校の普通科で中核となる英語IやIIにおける英語による授業は英語使用が半分以上の場合6~9%に留まっていると報告している。英語で話しかけなければ俯くのも当然と考える。
- 3) 発音が軽視される傾向にあるので、例えばdragとdrug, wantとwon't、あるいはmouseとmouthなどが区別しにくくなる。特にリズムやイントネーションに乗っていけない。結果として4技能(reading, speaking, listening, writing)の相乗効果が期待しにくくなる。
- 4) 聞き取りはコミュニケーションの重要要素であるとの認識があまりなく、テスト対策として多項式選択問題を解くだけでよいと考えてしまう。クラーク(1996:125)は「われわれ人間

は長い歴史のあいだに言葉を文字にして表すようになりましたが、言葉の基盤は昔のように音なのです。音をよく聞かないと、読む、話すなどは何もできないのです。」と述べているがその通りだと思う。

2. 2. テスト勉強を重視するあまりコミュニケーションの楽しさが経験できない。英語を使うことでコミュニケーションを取り、人と知り会おうとする気がおこらないしその気があっても気後れしてしまう。従って聞く機会が制限されることになる。
2. 3. 指導者の中には音声訓練の必要性を感じていない者もあり、その訓練の経験もない人が多いように思える。全国の公立中学校の英語教員で英検準1級及び他の検定の同等のレベルの取得者は27.7%という文科省の調査結果がある。^{注1}ちなみに準1級程度では自然な英語が楽に聞き取れるというわけにはいかない。指導者自身が日々自然な英語、例えばBBCなどの放送に接していないことを意味すると考えてよいだろう。時間をかければ訳読はかなりできると思う。従って単に英語力が低いというのではなく後述するように外国語習得の根本原理を理解していない指導者が意外に多いからではないかと思っている。
2. 4. 現場の実践者だけでなく、英語教育に関して権威を持った一部の研究者による言語習得過程における音声の重要な役割に関連した実態把握の甘さも指摘せざるを得ない。

3. 先行研究の検討

3. 1. Krashenの沈黙期(silent period), Palmerの孵化期 (incubation period) の存在

発表時期は前者が1985年、後者が1917年と違うが内容は似通っている。いずれも外国語学習の初期において、学習者に表現活動が表立って観察されず、指導者を含め外部からは単に沈黙と誤解されてしまうが、実は学習者の脳内では外国語習得が始まっており、言語習得装置 (Language Acquisition Device) が形成されつつある時期のことを言う。学習者によってはこの時期の長短はあるが、このこと自体を認識すれば発話の強要はせず、音声による豊かな働きかけをしながら徐々に意味のあるやりとりをし続けることで言語習得装置を形成することが可能である。

3. 2. $i+1$ のインプット

これもKrashenの唱えた考え方で、 i は interlanguage (中間言語) の事であり、その言語の完全な習得に至

る過程で生み出される言語体系という意味である。つまり学習者が到達した英語力に $+1$ の言語形式を含んだインプットで働きかけていくことが良いとされている。 $+1$ がどれだけのことなのか曖昧なところがあるものの指導者が学習者の到達度の実態を十分把握して様々な工夫したインプットを心掛ければ有効だと考える。ちなみに到達度をてっとり早く把握する方法はアウトプットの様子を注意深く観察することにある。沈黙期の長短が学習者により異なるのと同様、アウトプットの質も学習者の習得の仕方により変わってくることに注意したい。

3. 3. FonF (Focus on Form)

従来の言語形式を少しずつ積み上げていく指導をFocus on Formsとすれば、これとは逆に言語形式の習得度は把握しながらも焦点は意味のあるやりとりやコミュニケーション活動に置く指導がFocus on Meaningである。初期段階でこの音声重視のFocus on Meaningを基本的に行いながらも、学習者のアウトプットの質を判断し指導において重要と思われるエラーを、取り上げてやりとりの中でそれとなく直してあげるというrecastなどの手法を用いて指導していく方法もある。これがFocus on Formという考え方で最近注目されてきている。和泉(2009)にはわかりやすい説明がある。^{注2}

3. 4. Primary speech

これはPalmerが唱導したオーラル・メソッドの一環として使用された用語だが、話す・聞く技能を指している。これに対し、読み書きの技能はsecondary speech と呼ばれる。^{注3}Palmerは読み書きが最終目的だとしても、初期にはまず聞く・話すことから始める方が効率が良いと考えた。このことは次の節で述べるように認知科学によっても指摘されている。この聞く話す力はどんな人間にも自然に備わった力 (spontaneous capacities^{注7}) であるが、特に子供はこれに長けている。大人にもこの力は潜在的には存在しており、外国語学習の初期に活用すれば、読み書きから入るより効率的に学習できると考えられる。新里(1992)はPalmerが、時にstudial capacitiesは、spontaneous capacitiesを犠牲にして発達することもあるが、この両方の能力の活用が必要であると認めていると指摘している。

3. 5. 臨界期仮説

Moskovsky(2001)によると、外国語習得にも臨界期は存在する。臨界期終了までに新たな言語の習得の機会があると、母語習得で獲得された普遍文法が使用でき、言語獲得専門の脳細胞も働く確率が高い。しかし臨界期後以降には、普遍文法ではなく、母語に頼

る傾向にあり、言語獲得専門の機能ではなく一般的な学習機能が働く。この考えの背景にあるのは、母語習得と外国語習得は本質的に違ったものだという仮説 (fundamental difference hypothesis) である。^{注4} 確かにこの考えを採用すると色々なことが説明できる。

一般的な習い事は齢を重ねるとともに習得が緩慢となることを考えれば、臨界期以降の学習者は急に学べなくなるのではなく徐々に理想的な習得は困難となる場合が多いということが説明できる。次に、母語からの干渉の問題がある。臨界期以降だから外国語が学びにくいというのなら、何故母語と違った文法構造や直訳するとうまくいかない語彙は難しく感じ、逆に似た構造は比較的易しく感じるのだろうか。これも臨界期以降は母語に頼るので母語に近い言語なら学びやすいということで説明ができる。

しかしながら、第2言語習得においては臨界期を越すと学習が不可能となるというイメージが強く出すぎるとすれば、敏感期 (sensitive period) が存在すると考えることもできる。Palmerが指摘するように、臨界期後も自然な習得能力は完全になくなったわけではないので、第2言語の習得を母語習得に準じたやり方で集中的に行えば臨界期後始めたというハンディをかなり克服できる。Thomas and Johnson (2008) はこの用語を使っている。年齢がより関係してくるのは音声面や形態・統語面の方で語彙・意味は大人からでも習得できると言う。Thomas and Knowland (2009) は、敏感期は知覚や運動感覚系統の神経組織に主として見られて、抽象思考などの高度な次元の神経組織にはあまり見られないと言う。知覚から抽象的なものへと学習するのがよいとされている。外国語習得や音楽、体操などは知覚運動感覚系統の技能の開発が早期になされた方がよいということで、音感や音声言語の訓練こそが知覚運動感覚系統の技能開発である。

3. 6. 全身反応教授法 (Total Physical Response Approach)

1960年代にAsherが提唱したもので、命令を聞いて全身で反応すること、聴解演習を話すことの練習に優先させる教え方である。これはPalmerのImperatives (命令法) と考えは同じであるが、AsherはPalmerのことを知らなかったと言う。^{注5} Watanabe and Kawabuchi (2008) は、この方法は公立の中学校でもその効果が確認されたとしている。18名が15分ないし20分間の指導を23回受け、夏休みの前後にリーディングとリスニングのテストをしたところ統制群は成績が下がる傾向にあったが、実験群は下がらなかった。またこの方法は低学力層にも効果があったとしている。

4. 目的

外国語習得の過程の初期においていかに音声訓練が大切であるかを示す。そのために日本で外国語としての英語を効率良く学び高いレベルにまで到達できた、ないしは到達できる可能性を秘めた人達を例にとりてその学習過程を検討する。

5. 方法

英語の達人達やそれに準じる若者達の学習過程を分析するために以下のような外国語の4つの知識タイプを検討する。

5. 1. 外国語の知識タイプと言語習得

表1 明示的知識と暗示的知識の対比と4つの知識タイプ (Cf. Ellis, 2008:430) ^{注6}

	使用時の自由度が低い	使用時の自由度が高い
明示的知識	易から難への意識的な学びから得た宣言的知識や類推を注意深く使う段階 (Type A)	宣言的知識や類推を手続き的知識まで高めた段階 (Type B)
暗示的知識	主に類推によって把握された内在化が未熟な直観的知識を注意して使う段階 (Type C)	十分内在化された直感的な知識を駆使できる段階 (Type D)

5. 1. 1. 用語の説明

- 1) 実際は、明示的知識と暗示的知識は補完しあって実践的な力となる。前者はKrashen (1985) の言うlearningにより、後者はacquisitionによって形成されると考えられる。^{注7}
- 2) 宣言的知識とは、単語や文法の説明ができる力のことであり、言語使用の際には限定的な役割しか果たせないが、使用後のチェック機能は持っている。通常は母語による説明となる。
- 3) 手続き的知識とは、宣言的知識が、類推による直感の助けも借りながら訓練により比較的自由に使用できる状態になったものである。

5. 1. 2. 各知識タイプの説明

- 1) Type A: 訳読はなんとかできるが、意識的に納得しながら使う段階なので、すばやい理解や表現は難しいと感じる。なんといっても聞き取り

が弱い。

- 2) Type B: メッセージに焦点をあてる余裕が出てくるため言語形式はあまり意識しなくてすむ。一方で宣言的知識も使えるので、モニターとしても機能する。
- 3) Type C: 直感的に得た知識を基に間違いを気にせず積極的に表現しようとする。音声重視の習得環境が不可欠となる。児童が成功する場合はこの力を身につけた時である。^{注8}
- 4) Type D: 大量のインプットやインタラクションにより得られた直感的な知識であり技能そのものと言える。

5.2. 事例対象者

明治時代を代表して新渡戸稲造を取り上げる。札幌農学校に入学し4年間の課程を修めて卒業した。その後、後に東京大学となる高等教育機関の選科生となり英文学を学んでいたが、内川（2002:22）によれば「ぼくは大学で思う存分教えを受けられるものと思っていたが、そうではありません。。。」と札幌農学校で同期だった宮部金吾宛の手紙にあるという。こうして見切りをつけてアメリカのジョンズ・ホプキンス大学に進み、後に国際連盟の事務次長となる。

戦後の世代を代表して松本道弘を検討する。彼は留学もせず自力で英語を習得しアメリカ大使館の同時通訳者として採用されるまでになった。

そして一番若い世代を代表して福井県のある渡邊イングリッシュ・スクールに通う中学3年生達を考えてみる。内一人は中学2年生の時に全国中学生スピーチコンテストにおいて福井大会で優勝し全国大会にまで進んだ経験を持つ。彼女は今年3年生で既に英検の準1級を取得している。もう一人は同じくスピーチコンテストで全国大会まで進み準1級を取得している。また別の2級取得者の一人は同じ全国大会で4位入賞した。

6. 事例対象者の到達度及びその考察

6.1. 明治の英語達人、新渡戸稲造^{注9}

新渡戸（2007:40-41）によると、9歳で故郷盛岡を後にして築地外人英学校に入るが、そこには外国人教師が3、4名いて、毎日2時間英語を勉強した。しかし勉学がはかどっていないとみた叔父は翌年(1872)共憤義塾（旧南部藩藩校）に入れる。教科書はすべて英語で書かれていて、文法訳読で学習したらしいのだが、アメリカ人の教授夫人に発音を習った。間もなく選り抜かれた少人数のクラスに進級し、先生はウェイランド博士というアメリカ人だった。試験では一等賞を取ったと報告されている。(p.51) 12歳になった時叔父は発足したばかりの当時最高の学校であった東京

外国語学校に入れる。「ここでの授業はすべてアメリカ人かイギリス人によってなされた (p.52)」とあり、このようにして4年間過ごした。尊敬する先生から数学や英文学を習った様子が描かれている。ついでに言えば1876年のフィラデルフィアの独立100年記念博覧会に新渡戸の作文が出品された。9歳から16歳まで、音声を重視しながら4技能をバランスよく伸ばしたことで、かなり高いレベルの読み書きまで習得したといえる。クラークが自分が関係するマサチューセッツ農学校の平均的な学生にひけをとらない程レベルが高いと驚いた札幌農学校に新渡戸が入学できたのも理解できる。

斎藤（2006:30）には「彼[新渡戸]が英語達人になったのは、英語の授業を受けたからではない」とある。札幌農学校の図書館の英書をほとんど読んだから達人になれたという（斎藤、2009）のだが、読みの役割を強調しすぎている。新渡戸が農学校に行くまでに9歳から英語をアメリカ人から習い始め12歳から本格的に英語のみによる授業を4年間受けたということが大切だと思う。このようにいかに濃密な英語の音声の修業を外国語習得の初期に積んだかを見極めることが最も重要であると私は考えている。

9歳から20歳近くまで日本にいながらアメリカの学校に通ったようなものなので、当然思考力、言語感覚、動機などに加えて、4技能（話す、聞く、読む、書く）のバランスの良い習得、とりわけ聞く力の習得が可能となりType Cから出発しDの入口に到達しアメリカの大学で研鑽するうちにBまで辿り着いたと考える。その後アメリカ人の妻との会話やイギリスの文人カーライルなどの文学をたくさん読むなどし、また国際連盟での活躍や『武士道』などの英語による執筆などを経て高度なDに至ったと考えられる。

6.2. 昭和の英語達人松本道弘^{注10}

松本道弘（1940～）は、私立の高校時代に英語の母語話者による授業が僅かながらあったことが幸いしたようだ。さすがの松本も公立中学生の時は英語の母語話者の英語を聞いたことがなかったので、先生が言っていることが何もわからず、カタカナで書きとめて学んだらしい。「ゲット・アウトがゲラウ？私は一瞬絶句した。文字通り目の前が真っ暗になった。」(1981:17) その経験から「ネイティブの英語というものの遠さと、己の非力を骨の髄まで知った。」(p.18) と述べている。その頃から柔道における上達の段階を英語習得にも応用して、英語もコツコツ学習しても上達しない、2段階ほど上の人を目標にしなければならないと理解し、大学に入るとそれまで聴いていた松本亨などによるラジオ英会話などを聴くことをやめてしまったという。「こうした放送は日本人向けにアレンジした

英語であって、従来の妥協のない突き放した英語本来のリズムを失っているように思ったからだ。」(p.62)と説明している。大学生になると英語で話す会に出てある冷静に英語を話す他大学の2年生に出会い衝撃を受けるが、彼の成功の秘訣はディベートだと悟る。「英語の心はロジック。」(p.73)と喝破する。30歳で当時同時通訳の第一人者だった西山千に認められてアメリカ大使館に職を得ることで、海外に出たこともなく同時通訳者になれたのだが、彼の人生そのものが英語奮闘記だとすれば、その頃が彼の英語学習の絶頂期に近いものでその後は主として日本語による鋭い啓蒙書を書く中で厳しい研鑽を積み円熟期を迎えることになる。

臨界期をやや超えてからType Aからスタートするものの英語の母語話者の英語からのショックから自力でType Cの力が必要だと認識し、これを徹底的に追い求め、その結果未だ潜在していたPalmerのいうSpontaneous Capacitiesを十二分に活用することができたと考える。新渡戸よりは環境を自分で切り開く必要があったという意味で意志や動機づけが人並み外れて強かったことは事実であろうが、本能的に外国語学習の本質である音声訓練の必要性に目覚めたのが立派だったと思う。臨界期をやや過ぎていたが耳からの英語学習に徹底的に打ち込み普通の日本人につきまとう英語が聞けない、使えないという弱点を克服することができた。多聴、多読、英文日記、ディベートなどで特に口語体を中心とした英語では新渡戸に匹敵する高度なレベルのDに至ったと言えよう。英語習得の道を武蔵の剣の道に例えて英語道と呼び研鑽を積み、高い技能を日本に居ながら身につけることができたと言える。

6.3. 達人の卵の例：ミニ・イマージョン生

6.3.1. ミニ・イマージョンの概要

渡辺イングリッシュ・スクールでの活動で特筆すべきは、中学生のための全国英語スピーチ大会（高円の宮杯、旧高松の宮杯）の福井県大会の2位以内に入り全国大会まで行った者は過去15年間で12名にのほりその内決勝まで残った者は7名で10位以内入賞は3名だった。ちなみに2011年は中学2年で1名、2012年は中学3年で2名が全国大会まで進みその内1名が決勝で4位となった。

主宰者である福井在住の渡辺孝子が心血を注いだ実験グループであるミニイマージョンクラスを紹介する。幼稚園の年長からの5名に加えて中途から入学してきた1名の計6名を対象とし週3回、一回1時間の英語だけを使った授業を行う。算数、理科、そして社会科などの内容もアメリカの学校の教科書からヒントを得て扱い、英語の読みも易しいものから次第にレベルを上げていき国際理解教育に資するものを念頭にお

きつつ多読し英語で話し合う。観察レポートや簡単な意見文、日記、要約、スピーチ原稿など書くことも行う。生徒達は中学に進学してからレッスンは週1回となった。現在（2012年12月）中学3年だが、このクラスのうち過半数の4名が小学校卒業の時点で高校卒業程度と言われる英検2級をパスしている。他の二人はもちろん準2級に合格しており、中学1、2年生で2級に合格した。準1級を目指している者もいて、中学3年になって2名が合格した。彼らの通う中学では英語による授業ではないので友達に同じレベルの英語力を持つ者は皆無である。

6.3.2. ミニ・イマージョンの指導内容

週3回のミニイマージョンクラスの指導内容について指導者の渡辺孝子が説明したもの（そのままの文章）を紹介しておく。

「指導には一貫して英語を使用してきた。子どもたちにも英語の使用を絶えず促してきた。質問などに日本語を使った時にも、必ず子どもの言ったことをこのように言えばいいんだよ、と伝えるために英語にかえた。また私の話す英語が分からない時には、「What does it mean?」とか「What is it?」のように質問するようにさせた。英語の科学や算数などの本を読む時にも、子ども達が理解できていない単語や表現、内容は必ず英語で説明し、絵を描いたり、例を出して具体的に理解できるように努めた。結果、子ども達は理解できないことや意味の分からない英語は英語で説明されて理解できるものだという考えを早くから身に付けた。」

（2012年8月、私信）

臨界期中に週3回の英語だけの授業を通してType Cの養成で始まり全員が英検の2級をパスするまでになった。特に聞き取りが強い。中学生になってからは週に一回となり中学校での授業が中心となったので並行してType Aにも触れることになる。しかしType Cの威力は依然大きいものがある。詳しい説明は別の機会にしたいが、聞く話すことを重視した英語によるインタラクション、特に毎回増えて行くスピーディーなルーチンとなる定型会話の積み重ねや話を易しい英語で紹介したりすることによりKrashenやPalmerの考えを踏まえている。その上で、英語で意見交換しながらの多読、そしてレポート作成とPalmerのいうPrimary speech からSecondary speechという精神も活きている。更には発話の際のエラーをさりげなく言い換えたり、レポート作成でもエラーに気づかせたりしてFonFの理論までもが踏まえられた実践例といえる。

6.4. 事例研究のまとめ

1970年代に渡部昇一（1975）が平泉渉と英語教育に関して論争し、平泉が「音と切り離された外国語とい

うものが、どんなに習得に困難な怪物に変化するかということなのである。」(P. 65) と的確に述べているのに対し、渡部は教室ではあくまで訳読で日本語と格闘しつつ英語の潜在的な能力養うのが肝要だと説いた。この「知的作業」に向かない生徒も多数いることを忘れてはならないが、最近でも斎藤兆史(例えば2006)が、文法重視の高度な翻訳が言語の深い理解に基づいて初めて可能であるところからこれに準じた手法を教室に取り入れることを唱導している。根拠として新渡戸等明治の英語達人は英語で授業を受けたから上達したのでなくひたすら読んだからだと説く。

私は既にこの斎藤の分析に反論しておいた。本論文で取り上げた3世代の代表的な英語習得者に共通しているのが平泉のいう外国語が怪物化し手に負えなくなるのを意識的に(松本の場合)、無意識のうちに(他の2例)未然に防いだ、防いでいるということである。多読は必須であることに全く異存はないが、多読が難しく実践でき、その利点を享受できるまでの過程に対し十二分の配慮をすることこそが重要課題である。この点が日本の現在の外国語教育では今なお決定的に欠けているように思える。冒頭の問題の所在で指摘しておいた訳読至上主義などによる弊害が未だに後を絶たないどころか横行しているわけである。この弊害の克服への努力が大きな課題の一つであるという認識を共有すべきだと主張したのである。

7. 結論

本論では外国語習得の本質の一端を究明しようとした。明治や昭和の英語の達人の英語習得の様態を分析することでPalmerの諸説は先見の明があったと改めて確信した。事例対象者は全て学習の初期に濃密な音声訓練の時期が存在したことがわかった。新渡戸は臨界期中にこれを体験し効率良く英語を学んだが、なによりも英語習得を武器にしながら世界の平和などに貢献しようとする高い理想も持ち合わせていた。

松本は臨界期後に英語学習を開始したが、数年して英語の母語話者の英語が聞き取れないというショックから音声訓練の重要性に目覚めた。その強い英語習得動機と人並み外れた努力によりハイレベルの同時通訳ができるまでになった。彼の奮闘は現状の外国語教育のあり方に警鐘を鳴らしているだけでなく、臨界期を少々過ぎて学習し始めてもやり方次第では希望が持てることを示している。

3つ目に取り上げた現在中学3年の6名の生徒達は臨界期中から英語学習を開始し、小学校時代は週に3時間、中学に進学してからは週1時間というささやかな量だったが、バイリンガルの日本人教師による英語のみの授業という音声訓練を受け続けることにより成功した。算数や理科といった内容を英語で学び、読み書

き、多読、スピーチなどもこなす。ここでは臨界期が終了するまでに早期の教育をすると外国語が怪物化しないということと高い指導者の資質の必要性を示している。

指導者は易しい英語を正しい音声で駆使できるだけでなく、生徒のエラーに気づくだけの高い英語力を持ち合わせている必要がある。また、ここで述べたような外国語指導の最初は音声指導をいかに効果的に進めていくことが大切であるかについての見識がある。更には、国際理解教育を視野に入れた長期的なカリキュラムを展望でき、生徒の英語学習を単なる受験対策と捉えないような指導ができるような資質が指導者に望まれるのである。

以上の考察からの示唆は、受験対策に追われ、日本語ばかりを使つての訳読主義が未だに主流を占めている結果、6年も8年も週に何時間も学習しながらほとんど聞けず話せず速読はできない、なんとか書いても日本式英語で判読不可能な場合も多いという現状は変革しなければならない。我が国はPalmerという素晴らしい先達を持ちながら良く言って理念だけが先行し、あるいは理念が曲解されたりして^{注1}、なかなか本当の意味で改革できずにいたわけだが、彼の精神が戦後も脈打つ今回の新指導要領を逃げずにしっかり実施していけば希望はある。打開策を模索するための発奮材料となると思う。まずは真剣な聞き取り訓練とその重要性を教師が率先して体験し、それによる英語習得の進歩を実感した上で、生徒に伝えていくことから始める他ないであろうと思う。

注1：2012年の調査(国際共通語としての英語力の向上のための5つの提言の実施状況調査)。なお準1級などを受験したもののうちで36.8%が受かったという。

注2：Doughty and Williams (1998) にはMichael Longがこの考え方の先導的な役割を果たしたとある。

注3：Palmer (1924) で使われている。ちなみにこの区別はBaker (1988:177) にある Jim Cummins のBICS (Basic Interpersonal communication skills) とCALP (Cognitive Academic Language Proficiency) の区別に通じるものがある。更には言えば最近の指導要領での「素地」と「基礎」も同じような方向の区別であると考えられる。

注4：Bley-Vroman (1989) 参照。

注5：『現代英語教授法総覧』大修館、1995 (p.153) にこのような指摘があるが、詳細は不明。

注6：Ellis (2008) では暗示的と明示的知識は宣言的知識と手続き的知識は同じことのようなので暗示と明示の2つにまとめてそれぞれの使用自由度で4つのタイプにまとめている。ここでは4つのタイプ分けは引き継ぐが明示的知識におい

て宣言的と手続き的知識を認めておいた方が、説明力があると考えた。

- 注7：Krashen (1985) によるこの区別は、Palmer (1922) が、studial capacitiesとspontaneous capacitiesを区別したのと似通っている。spontaneous capacitiesがacquisitionに関係し、前者のstudial capacitiesがlearningに関係している。宣言的知識が手続き的知識に練習の結果変わっていくことはわかるが、明示的知識と暗示的知識の間の関係は、影響し合うことはあると筆者も考えているが微妙である。ただ明示的知識を教えても生徒は同時に暗示的知識も得ようとするわけだし、対象言語を使って文脈や場面で教えると暗示的知識の獲得が促される。暗示的知識を教えようとしても明示的の一步手前まで構えができる場合もある。従って実践力というものは、明示的知識を主としているか暗示的知識を主としているかの違いはあるものの、両方が関係してくるのではないかと考える。
- 注8：Cook (2010) p.134.彼は訳読の礼賛者というよりは外国語習得における母語の役割を重視する立場でそれはそれなりに筋が通っている。その彼にしても児童はできるだけ直接対象となる外国語を通してTypeCの養成を目指すのが理にかなっていると述べている。
- 注9：同じような例として、斉藤秀三郎、宮部金吾、内村鑑三、岡倉天心、佐藤昌介などがあげられる。当時は西洋文明を取り入れようとする趨勢があり、特に志の高かった者とその子弟を中心に英語学習熱が沸き起こったが、国も新渡戸らが通った官立の英語学校を創設するなどしてこれを奨励したのであり、決して新渡戸だけが若くして集中的な音声訓練を経験したのではない。例えば新渡戸と同じような経歴を経て札幌農学校に通った人で、上述の宮部、内村、佐藤以外にも、それほど有名になってはいないものの相当な英語レベルに達した人はかなり居た筈である。従って確かに検証は必要ではあるが、斉藤 (2005) が中嶋嶺雄に対して行った、岡倉天心と新渡戸稲造の二人だけを見て早期英語教育が成功したと断ずるのは危険という批判はあたらなないと考えている。
- 注10：同様な例として國弘正雄、村松増美、小松達也などが思い浮かぶが、著者が個人的によく知っていたということで松本を取り上げた。
- 注11：小篠 (1995:93) は1923年に加茂によって訳されたThe Principles of Language-Studyにおいて「適当な外国語の発音をも獲得しない間に、外国語を話させたりする事は、本国人の国語と違った、外人流の国語を用ひさせる事にして

了う。」(加茂：12) の箇所では発音だけでなく「統語法に熟達する前に学生に作文を書かせたり、あるいは、必要な訓練学習をしないうちに学生に外国語で話させたりすることは」(Palmer:134) と原文にはあるのだが、このPalmerが一番言いたかった部分が意図的に省略されているとしている。当時の我が国の状況の中でこの部分はあまりに過激すぎ和訳するのは適当でないと訳者が判断したのであろうと指摘している。この指摘については更に慎重に検討する余地はあるが、戦後の英語教育を振り返ってみるとどうもPalmerの理念だけが指導要領の中に生き続けてきたとは言える。

参考文献

- 和泉伸一 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店、2009。
- 内川永一郎『永遠の青年新渡戸稲造』新渡戸基金、2002。
- 太田雄三 『英語と日本人』TBS ブリタニカ、1981。
- 小篠敏明『Harold E. Palmerの英語教授法に関する研究—日本における展開を中心として』第一学習社、1995。
- 加茂正一『外国語研究者のために—パーマー著』訳本文英堂、1923。
- クラーク、フレゴリー 『クラーク先生の英語勉強革命』ごま書房、1996。
- 斎藤兆史「小学校英語必修化の議論にひそむ落とし穴」『小学校での英語教育は必要ない!』大津由紀夫編集、慶応義塾大学出版会、2005。
- 斎藤兆史 『日本人に一番合った英語学習法』祥伝社黄金文庫、2006。
- 斎藤兆史 「学校で使える英語なんて幻想だ」朝日新聞、8月1日、2009。
- 鈴木崇生『脳のメカニズムからみた英会話習得法』三一書房、1991。
- 新渡戸稲造 『幼き日の思い出』(加藤武子訳) 新渡戸基金。2007。
- 新里眞男「H.E.Palmerの指導法とその現代性」『筑波大学学校教育学部紀要』第14巻、1992。
- 平泉渉、渡部昇一 『英語教育大論争』文藝春秋、1975。
- 松本道広 『英語道』プレジダント社、1981。
- 渡邊一保「Oral Method」『これからの小学校英語教育—理論と実践』樋口忠彦他編研究社、2005。
- Asher, James J. *Learning Another Language through Actions*. Sky Oaks Production, 1977.
- Baker, C. *Key Issues in Bilingualism and Bilingual*

- Education*. Multilingual Matters, 1988.
- Bley-Vroman. What is the logical problem of foreign language learning? In S. Gass and J. Schachter (eds.) *Linguistic Perspectives on Second Language Acquisition*. Cambridge University Press, 1989.
- Cook, Guy. *Translation in Language*, Oxford University Press, 2010.
- Doughty, C., and Williams, J. *Focus on form in classroom second languasition*. Cambridge University Press, 2008.
- Ellis, Rod. *The Study of Second Language Acquisition*, Oxford University Press, 2008.
- Ellis, R. Loewen, Elder, Erlam, Philpand, Reinders. *Implicit and Explicit knowledge in Second Language Learning, Testing and Teaching*. Multilingual Matters, 2009.
- Krashen, Stephen ,D. *The Input Hypothesis*. Lonman, 1985.
- Moskovsky, Christo. 'The Critical Period Hypothesis Revisited.' *Proceedings of the 2001 Conference of the Australian Linguistic Society*, 2001.
- Nitobe, Inazo. *Reminiscences of Childhood*. Maruzen, 1934.
- Palmer, H.E. *The Principles of Language-Study*. Oxford University Press, 1964. (George G. Harrap & co. Ltd. 1922)
- Palmer, H.E. Memorandum on Problems of English Teaching, 1924. *The Selected Writings of Harold E. Palmer*, Vol.2 本の友社、1995.
- Palmer, H.E. "The Reformed English Teaching in the Middle-grade Schools." 1927. *The Selected Writings of Harold E. Palmer*, Vol.10 本の友社、1995.
- Thomas, M. and Johnson, M. New Advances in Understanding Sensitive Periods in Brain Development, *Current Directions in Psychological Science*. Vol. 17, No. 1, 2008.
- Thomas, M. and Knowland V. Sensitive Periods in Brain Development-Implications for Educational Policy, *European Psychiatric Review*, 2009.
- Watanabe, Kazuo and Kawabuchi Koji. 'Long-Term Retention of English through TPR in a Japanese Junior High School.' 『奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要』 No. 17, 2008.